

## 十六日櫻

伊豫國温泉郡山越村に『十六日櫻』と云ふ大層名高い櫻の古い樹がある。その名の理由は毎年陰曆の正月十六日——しかもその日にだけ花が咲くからである。それで櫻の元來の性質から云へば、春を待つて花咲くのであるが、——この櫻の開花は大寒の時節である。しかし十六日櫻は自分のものでない——少くとも元來自分のものではなかつた生命で花をつける。その樹には或人の魂が潜んで居る。

十 六 日 櫻

その人は伊豫の武士であつた。樹はその人の庭にあつて、時が來れば——即ち三月の終りか四月の始め頃には、いつも花が咲いた。子供の時にはその樹の下で遊んだ。兩親や祖父母や祖先は、百年以上も引續いて季節毎に讚美の歌を書いた短冊を、花の咲いた枝にかけて來た。彼自身も大層老いて——子供達には皆先だたれた、それでこの世に心残りのものはその樹の外に何にもなかつた。ところで或年の夏、その樹が凋んで枯れた。

この上もなく老人はその樹のために悲しんだ。そこで親切な隣人達は——老人を慰めるために——綺麗な櫻の若木を見つけて、その庭に植えた。そこで老人は禮を云つて嬉しさうな顔をした。

しかし實際老人の心は痛みに満ちてゐた、餘りに老樹を愛してゐたので、何物も代つてそれをな  
くした悲しみを慰める事ができないのであつた。

遂に老人によい思ひつきが浮んだ。枯れかかつて居る樹の助かる方法を思ひ出した。

(それは一月十六日であつた)獨りで庭へ出て凋れた樹の前に平伏して、云つた、『どうか御願だ  
からもう一度花を咲かして貰ひたい——自分はお前の身代りになるから』(即ち神々のなさけに  
よつて、人は外の人、或は動物或は樹木のためにでも、實際生命をすてる事ができる——そして  
身代りに立つ事ができるものと信じられて居る)それからその樹の下に白布といくつかの敷物を  
敷いて、その敷物の上で武士の式通りの切腹を行つた。それでこの人の魂はその樹に移つて、そ  
の時刻に花を咲かせた。

それで一月十六日、雪の時節に、毎年今もなほ花が咲く。

(田部隆次譯)

*Jiu-Roku-Zakura. (Kwaigan.)*